

आयूस: あーゆす

〈発行〉京都文教短期大学附属図書館／京都府宇治市旗島町千足80

文にこもる命 字にこもる力

図書館長 照屋敏勝

自分の番
父と母で二人
父と母の両親で四人
そのまた両親で八人
こうしてかぞえていくと
十代前で一〇二四人
二十代前では
何と百万人を越すんです

過去無量のいのちの
バトンを受けついで
いまここに自分の番を
生きている
それがあなたのいのちです
それがわたしの
いのちです (相田みつを)

いのちは「生の血」であり、「生の力」であり、「生の霊」である。つまり、いのちは血であり、力であり、霊性である。「霊性」は純化された魂である。

生命誌研究館副館長で生物化学者の中村桂子氏によると、生物の生存を規定している要素は3つであるという。

1つは、循環である。生物は発生してから無限のくりかえしを続けながら現在に至っている。その過程で進化も起った。反復やくりかえしは、われわれの生活や学習や生涯においても重要である。

2つは、組み合わせである。生物は多様な組み合わせによって生物の多様性と複雑性を獲得してきた。

組み合わせは変化と発展の基礎であり、組み合わせによって新しい価値や特性も生まれてくる。

3つは、可塑性である。生物はそれぞれ何らかの可塑性をもっている。それゆえに、いろいろな環境に適応している。環境が変化すれば変化した環境に適応する。新しい環境の中で新しい可塑性を獲得する。

生物の中で最も大きな可塑性をもっているのは人間である。したがって、人間は環境への適応も「順応」ではなく、「創造的適応」であり、「変革的適応」である。

その適応能力や可塑性、あるいは創造性を高めることが教育の大きな課題である。

中央教育審議会は、「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」(答申)の中で、新しい教育理念として「生きる力」の育成を最も強調している。それは子どもたちの「生きる力」が衰弱してきているからである。

知は力である。「生きる力」の1つは知の力である。知のエネルギー源の1つは書籍である。1冊の本の中には、1人の人間の知識や知恵だけでなく、人類が長い歴史の中で蓄積してきた叡智も含まれている。何らかの命と力が必ず宿っている。

「いまここに自分の番を生きている」、このいのちをどうするか。学びはいのちの問題である。

わが学生時代の図書館記

助教授 若井 勲 夫

もう一世代も昔のこと、京都大学入学式の前日に時計台二階の講堂で新入生ガイダンスがあった。その時、ローマ法の権威の附属図書館長が、京大の蔵書数は全国で二位だが、東大は関東大震災で焼いてしまい、古い貴重書は京大の方が多く持っている、また、書庫に入ると自分が何と小さな人間かということがわかると語ったことを今に覚えている。書物の命運、学問の厳しさが身に沁みる思いであった。

教養部の二年間は旧三高名残の木造の図書室で、専門化せずゆったりと一般教養を手探りつつ、参考図書室に籠り、大型の辞書や事典に親しんでいた。附属図書館は広い閲覧室に黒光りする大きく堅牢な机、壁には歴代館長の肖像画が掲げられている。カード室には膨大な書物が目に見える形で粛然と収められている。また、職員の好意により書庫に入れていただき、まずエレベーターに驚き、天井に届くほど高い書架が整然と並ぶ状景に圧倒された。和本は帙に入り、達筆の書名が記されている。分類は勿論京大独自の方法である。長年の伝統の重みが本の重みとともにのしかかってくる。私はこれで果たしてやっていけるであろうかと不安感に打ちのめされた。また、11月の学園祭の最中、我関せずといつも通り静かに開館しているのに感動した。授業は休みであっても、研究は休むことなく続けられる。厳然たる学問の自立と図書館の独立的存在を実感し、戦時中、工事の中断のまま完成した二代目図書館の雄姿を改めて仰ぎ見た。後の大学紛争時は止むを得ぬ臨時休館が少しあったが、自主性は最大限守られた。

文学部では哲史文の三学科に分かれて閲覧室と

書庫があり、書庫は開学以来自由に出入りできる。暗く陰気で所狭しと並ぶ書架の間を縫いつつ、古書独特の黴臭さを味わう。手垢に汚れ、ぼろぼろになった本もある。製本した雑誌類、写真撮影した自家製の文献、洋装本の間は無造作に立っている和本、片隅には巻子本や桐箱入りの棚がある。うろろうと模索した教養課程と違って、奥深い学問世界の一端に触れる思いであった。

本を借りて読みながら、大抵の書に書き込みや誤植訂正、傍線などの印を見つける。確か漱石の「三四郎」にもこれに驚く場面があった。一体誰がいつ書いたのか、同好の親しみと懐しみを感じた。一方、時にはほとんど読まれた形跡のないものもあり、何となく優越感に浸りつつ、この本はいつか読者を待っていたのだと充実感を覚えた。座席は好みの場所というものがあり、一度座るとそこでない落ち着かない。周りを見渡しても同じような顔触れで定まっていく。専攻が違い、言葉を交わすことがなくても何となく親愛の情を感じ、何を調べているのだろうかふと気にかかる。

国文のある先生は「本の顔を見よ」と常々言われた。カードを繰りながら他の本のことも目にするが、実際に手に取って、装幀や体裁、目次など一冊ごと身近に親しむように接するということがある。ある本を捜して、他の本に目が行くことがよくある。そこから思い掛けない発見や発展に至る。この経験、実感が学問研究に大事なことである。

学生時代の青臭く迷える図書館体験が現在の私に達している。図書館は私にとって、情報ならぬ知的活動の基盤であり、孤なる精神世界である。

私のすすめる 3 冊

専任講師 金井 朋子

1 『日本昔話百選』

稲田浩二・和子編著；三省堂

きらきらと瞳を輝かせ、幼な心をおどらせる『むかし』ってどんな話のことだろう。そこは、驚くほどの魔法の世界であり、美味しい食べ物にみちた世界であり「日本の心」があり「無数の語り手の笑い声や、語り継いできた無名の祖先たちの思いや、採話した人々の汗がにじんでいる」のが伝わってきます。

2 『野にありて目耳すます』

姫田忠義対談集〔1〕〔2〕；はる書房

『自然との深いつながりをもつ庶民の生活と生活文化を記録』し続ける、日本でも希有のそして、世界でも注目されている映像民族学者；姫田忠義と民族学、文化人類学、哲学、史学、農学などの各分野の第一人者との、含蓄深いまた多岐にわたる対談集。

3 『ふゆめがっしょうだん』

富成忠夫、茂木 透=写真 長 新太=文；福音館書店

優れた精緻なカメラと高度な技術を身につけたカメラマンが冬枯れの林や庭で、葉の落ちた後の葉柄を撮影したとき、そのレンズの向こうには、冬の芽がまるで、まぎれもなく幼児の描いた顔さながらの表情をしてうたっているのです。

科学知と神話的叡知が見事に融合しているとさえ思える、希有な素晴らしい絵本。

Pray, and Any Flower of Yours Will Come Out (念ずれば花ひらく)

Shinmin Sakamura
(坂村真民)

When (Mother was) in a painful position,
Mother always said this saying to herself.
I also began to chant the words one day
without being conscious of it.
Every time I recited them since then,
I felt, to my wonder, a flower of mine
coming out, one after another.

苦しいとき
母がいつも口にしていた
このことばを
わたしもいつのころからか
となえるようになった
そうしてそのたび
わたしの花がふしぎと
ひとつひとつ
ひらいていった

『こころの手足』を読んで

幼児教育専攻2回生 松村 祥

中村久子さんは、2歳の時に突発性脱疽^{だっしゅ}という病気で両手、両足を失ってしまった。この本を読んで、自分は今のままでいいのだろうかという疑問を持ち始めた。私は手も足もある。だから、手を使える事がどんなにすばらしい事か、歩ける事がどんなにすばらしい事なのか考えもしなかった。久子さんは、自分には切断されて短い動く手足がある事が有難いと言っておられる。また刑務所で「手足があったら、あんたたちと同じように悪い事をしたかもしれんけど、手や足を失ったお蔭で、悪い事せんですんだと思う。」とおっしゃっている。私は、こういう考えができるという事はすごいと思う。久子さんは自分が苦しくてもプラス志向で物事を考えておられる。悪い事が起こっても、その人の考え方次第で、良くも悪くもなる。私は、自分で悪くしている方が多く、一度何かにつまずくと、そこからなかなかはい出せない事が多い。だから、久子さんの考え方、生き方を尊敬する。どんな小さい事でも有難いと思う心が本当に大切だ。

久子さんは、自分は生きてきたのではない。生かされてきたのだと強く言うておられたように、周りの人たちが久子さんの手となり足となって支えて、温かい心で久子さんを包み込んできたように思う。手がない人が、縫い物や料理をするなんて信じられない事だ。しかし、それは事実であった。たくさんの苦勞と努力、できるようになりたいという強い意志と根気を久子さんは持っておられたのだろう。もし、今の私が手足を失ってしまったなら、生きる希望など失ってしまうような気がする。人は苦勞したり、失敗したり、悲しい思い

をした分だけ人に優しくなり強くなるのだと思う。しかし、今の私は失敗を恐れて何もできない状態だ。手足がない方でも、自分の事は自分でし、一生懸命、生きておられるのと思うばかりだ。手足は大切なものだ。今初めて手足がある有難さを感じる事ができる。世界にはハンディキャップを持った方がたくさんおられる。私も夏休みにボランティアをして、そういう方に出会った。久子さんは、そういうハンディキャップを持っている人たちのお手本であると同時に、健常者にとってもお手本だと思う。この本の題名のように、久子さんは私たちのこころの手足であり、こころの支えである。私はこの本を読んで、自分は本当にちっぽけな人間だと思った。しかし、ちっぽけでも努力すれば、頑張れるかもしれないと思い始めた。久子さんは私に手足がある事のすばらしさ、生きている事のすばらしさを教えてくれた。そして、それと同時に生きる希望をも与えてくれたのではないだろうか。せっかく生まれてきたこの命を大切にしなければならない。

中村久子著『こころの手足』（春秋社）

आयुसः あーゆす について

サンスクリット語（インド）で「いのち」を意味する言葉です。

デザインは京都文教大学就職指導課の野嶋知世子さんをお願いしました。ありがとうございました。